

# 霞とかすみの問題をめぐっての覚え書き

山本 一

「かすみ」と「きり」とは実体は同じであり、平安時代になつて「春は霞・秋は霧」と季節によつて使い分けられるようになったという説明をよく目にする。また、「霞」は中国古典語では「朝焼け・夕焼け」の意であり、和語の「かすみ」とは異なるということも、和漢比較文学への関心の広がりと共に常識となりつつある。しかし、この問題を講義の中のエピソードとして取り上げた際に気づいたことだが、和語「かすみ」が「霞」の字によつて表記されることになったのはなぜかという点、ひいては中国古典語における「霞」「霧」その他の語彙と、上代日本語における「かすみ」「きり」その他の語彙との間に、どのような対応と不対応があるのかという点については、あまり多くは論じられていないようである。もとより中国古典文章語と上代日本語とは、いずれも高度に専門的な習熟を要する研究分野であり、その両分野にまたがる右のような課題が、私の手

におえるとは思われない。本稿はあくまで、講義中に生じた素朴な疑問を、いささか整理して示すものに過ぎない。専門家の目からは無用不当の言が少なくないと思われるが、ご批評とご教示の労をお取りいただければ幸いである。

## ①「霞」に対応するべき和語は何か？

小島憲之「上代に於ける詩と歌」「霞」と「霞かすみ」(松田好夫先生追悼論文集・万葉学論集)統群書類従完成会1988年は、「霞(カ)」と「霞(かすみ)」の違いはすでに近世の詩人が指摘しているとして、三浦梅園の『詩顰』(天明四年1786)、六如『葛原詩話』(天明七年)を引いている。ここでは『詩顰』を示す(巻之六・雑記・三十八丁オ、中文出版社刊複製五三七頁、表記を一部改める)。

烟ノ字、火ノ気ナルハ勿論ナリ。其他ノ烟ト云ハ、霧ノ字

ヲ用ユベキ処ニ用ヒテ、烟波・烟花等ノ如キ、皆氤氳蒙濛ノ状也。霞ノ字ハ、ホデリ、一名ヤケ、朝ヤケタヤケノヤケ也。

右の内、前半については本稿①で触れることとし、ここでは後半に注意する。江戸中期の時点では、漢語「霞」の意味にはば正確に対応する和語として、「ほでり（火照り）」やけ（夕焼け・朝焼け）が考えられていたことが判る。これらの語は、その使用をどこまで遡ることができるであろうか。

『日本国語大辞典』の「あさやけ」の項は、『文化句帳』二年五月「朝やけがよろこばしいか蝸牛」ほか近世の用例を挙げが、その中に、北静廬の考証随筆『梅園日記』（弘化二年185）の用例がある。当該箇所を、『日本随筆大成』第三期12により、適宜表記を補って示す。

『七玉集』に、家良、「山のはもかすむと見ゆる朝あけにやがてふりぬる春雨の空。按ずるに、「朝あけ」の「あけ」はあかきをいふ。「あ」の声の「や」のごとく聞こゆるは、歌合、根合などのたぐひ也。又『新撰六帖』に、衣笠内大臣、「山のはにほたりせる夜はむろの浦にあすは日よりと出る船人」とよみ給へるは夕あけにや。されば朝あけは雨夕あけは日よりとふるくよりいへる謬なるべし。

以下、「唐国にても」として「朝霞間を出ず、暮霞千里を行く」という「呉の謬」他の用例、同じ問題を扱う「友人西島蘭溪が

坤甯日抄」（後述）の記事等を引きいている。ここで取り上げられた『七玉集』は「弘長百首」（弘長元年126）の別名、この歌は「春雨」の題に見える。『日本国語大辞典』は「朝焼け」の意の「あさあけ」を立項して、用例としてこの歌と右の『梅園日記』を掲げている。また、静廬が引くもう一首の歌は、寛元二年1244頃成立の『新撰和歌六帖』の「浦」題に見えるもので、作者の「衣笠内大臣」は、（静廬が気がついていただとうかが判らないが）先の歌の作者と同じ藤原家良で、この歌は『日本国語大辞典』の「ほでり」の項の「朝焼け・夕焼け」の意味項目の用例として採用されている。つまり、偶然にも言うべきか、『梅園日記』の同じ箇所が引く同一作者の歌が、漢語「霞」に相当すると思われる二つの和語の十三世紀に遡る用例として問題になることになる。

このうち、「弘長百首」の歌の「あさあけ」を「朝焼け」の意とすることについては、疑問が感じられる。「あ」が「や」となるという説明も疑わしいが、むしろ、歌意から見て、「朝夜が明ける頃に」の意の「あさあけ」（『日本国語大辞典』では別語として立項）と解して支障がないからである。顕昭『拾遺抄注』が、『万葉集』にも見える「秋立ちていくかもあらねどこの寝ぬるあさけの風は袂寒しも」について「あさけは朝なり。あさあけともいふ。朝明なり。（以下略）」と注するように、万葉で「朝（旦）開・朝（旦）明」と表記される「あさけ」は、

「あさあけ」と訓まれることもあり（西本願寺本訓にも散見）、定家『僻案抄』はこの形を後世のものとしているが、いずれにせよ鎌倉期の歌人は同語と見ていたと思われる。家良歌の「朝あけ」も、万葉語「あさけ」と同義のつもりで用いられたと見てよからう。

これに対して、もう一首の「ほてり」の方は「朝焼け・夕焼け」の意と解してよいと思われる。ただし、静廬は版本の本文に拠ったかと思われるが、『新編国歌大観』（底本は日本大学総合図書館蔵室町末期写本）では、

やまのはにほてりせぬやはむろの浦にあすは日よりといづるふな人

と第二句が一字違いで意味が逆になっている。なお、穂久邇文庫蔵室町初期写本（『日本古典文学影印叢刊』15所収）、『夫木和歌集』（『新編国歌大観』本文のほか、寛文版本も）も同様の本文である。「朝焼けは雨」の諺によって解すれば、ここでは未明に現れる東の空の赤光を指すことになろうか。右記の影印本の解説（久保田淳）が、「だいたいにおいて誹諧的傾向が強く、正雅・典雅ないしは優艶さからは遠い作品が少なくない。中世国語資料として貴重な用例も多く見いだされる」と述べるような『新撰和歌六帖』の性格の一端を示す、通常の歌語以外の語を使用した例である。ここから見て、朝焼けや夕焼けを意味する「ほてり」の語が鎌倉期に存在したことは確実であり、

少なくとも口語レヴェルでは、もう少し古くから使用されていた可能性が高いと思われる。

なお、前述の『梅園日記』が引く『坤斎日抄』（文政十一年1828）上巻の箇所には「原希翊曰、邦俗以霞為譌誤矣、霞者所謂日焼也」（続日本儒林叢書による）云々とあり、西島蘭溪はさらに榊原篁洲（字は希翊、1664-1706）の『榊巷談苑』を見ているのである。その『榊巷談苑』には、「霞の字をいにしへよいかすみとよめどもあやまりなり。霞は俗にいふ日やけのことなり。朝やけを朝霞といひ、夕やけを暮霞といふ。…」（日本随筆大成3期4）とあって、一七世紀には朝夕の反照現象を日常語で「ひやけ」とも言っていたことが判る。『日本国語大辞典』では「ひやけ」のこの意味を立項しないが、『日本方言大辞典』（小学館1988）には、「好天の前触れの夕焼け」を指す例が掲げられ（鹿児島県肝属郡）、また朝焼けを指す「あさひやけ」も掲出されている（栃木県、群馬県山田郡、千葉県印旛郡）。

しかし、いまのところ、文学作品などの一般的な文獻資料においては、「ほてり」系統にせよ「やけ」系統にせよ、朝夕の反照現象を指すと明かな語で、平安期以前の用例を指摘されているものはないようである。後世に夕暮れの残照を指す「ゆうばえ」は、『日葡辞書』に「夕方のころに、花などが一段と見事に美しくみえること」と解説され、平安時代の文学作品の用

例もこのような意味で解釈されている。すなわち、朝夕の反照現象を指すための固有の語彙は、平安時代以前の文章語には存在しなかったか、少なくともあまり一般的に使用されなかった可能性がある。あの「枕草子」の「春は曙」「秋は夕暮」の文章も、そのような語彙を用いることなしに書かれているのである。

より精緻な調査なしには意味のある結論は出せないが、もし天象に関する上代語の語彙体系の中で、漢語「霞」の中心的意味に対応する箇所が、いわば空席であったと仮定すると、「霞」は特定の和語に制約されないいわば自由状態の字となり、やや異なる意味の和語の訳に転用することも、比較的容易であったろうと考えることができる。あるいは逆に、漢字の意味に対応する多くの和語を列挙する『類聚名義抄』などの古辞書類にあつて、なお「霞」の訓には「カスミ」のみが宛てられていることは、和語「かすみ」が、いわば空席代理出席の形で反照現象をも意味することが有り得たことを示すのかも知れない。後者の可能性については、本稿③で言及する。

## ②和語「かすみ」に対応するべき漢語(漢字)は何か?

前掲『詩歌』の記事は、通常「かすみ」の語が意味する視界不良をもたらし現象に該当する漢語としては、「靄」「煙(烟)」などが(「霧」以外に)あることを示唆する。これらの字は、

平安期以前にどのような和訓が与えられていたのであろうか。

『類聚名義抄』は、「靄」については「キリ・クモル・タナヒク・アタ・ム・アカル」、「煙」については「ケブリ」「モユ」を示す。『白河本字鏡集』は「靄」に「アタ・ム・カスカナリ・ツクス・アタクモ・タナヒク」、「煙」に「ケフリ・モユ・カマト」。なお「霞」には「カスミ」とともに「タナヒク」を示す。『寛元本字鏡集』では「靄」に「クモル・カタム・アカル」が加わるほかは『白河本』に同じ。なお、「タナヒク」の訓は、三本とも「靄」「霧」に見える。

この程度の調査ではほとんど意味のあることは言えないのであるが、気づかれる点の一つは、「靄」の字についての現行の訓「モヤ」の不在である。「もや」は、『日葡辞書』に「湿気を含み、雨を催す一種の霧」と説明され『Moqea vata(もやが降りた)」の用例がある。しかし、『日本国語大辞典』ではこれが初出用例で、平安鎌倉期以前の一般的な文学作品には見られない語のようである。現代の「もや」は、気象用語では「霧」または「煙霧」と同じ浮遊微粒子による現象で、より視界不良の度合いの軽いもの(100以上)を指すと定められているが、日常語としての「きり」との使い分けは、地方や個人によっても差があると思われる。「もや」の語誌や「靄」の字の訓として定着した経緯は興味を引くが、今は立ち入る準備がない(ちなみに、山や海の霧をさして広く用いられている「ガス」系の

語は外来語と解されているが、英語<sup>98)</sup>には通常の用法ではこのような意味のものはなく、成立の経緯に興味を持たれる。

「露」「煙(烟)」については、いずれも意味的には「霞」よりも「かすみ」の和訓を宛てられ得る字であったと思われるにもかかわらず、実際にはそうならなかったのである。「煙」の場合は、「けぶり」との結びつきが優勢であったため、他の訓があてられにくかったということがあるかも知れない(ただし、あまり説得的な説明ではない)。「露」の場合は、「もや」という語との結びつきは上代には存在しないと思われるので、そのために「かすみ」の訓が排除されたということは有り得ない。このことは逆に言うと、「霞」と「かすみ」の間に、「露」や「煙」と「かすみ」の間にあるよりも優勢な結合要因が存在した可能性を示唆するかも知れない。

### ③「かすみ」の範囲と「霞」との接点

『万葉集』を中心とした上代文学の「かすみ」(およびその「きり」との関係)については、井上富蔵「万葉集における用語の一考察―霞と霧について―」(岡山大学法文学部「学術紀要」13、1965)、戸谷高明「古代文学の研究」(桜楓社1965)、同「万葉の霞」(『万葉集を学ぶ』第五集、有斐閣1986)、政所賢二「霞たつ」「霞たなびく」の表現について―万葉集を中心に―」(『解釈』1983)などの研究があり、秋の「かすみ」の

用例もあるとはいえ、既に『万葉集』で主に春の事象とする見方が成立していること、また「たなびく」の語と親近性があることなどが注意されている。本稿の観点から注意されるのは、「かすみ」は「山や野に関係して多く詠まれて」おり、「遠望のもとに、把握されている場合が多い」のに対して、「霧は必しも距離的な認識を伴わない」という井上富蔵の指摘であろう。「かすみ」は、優越的には空に現れる不定形の広がりとして観望されるものであり、この形態の点では(色彩はともかく)「霞」と共通すると考え得る。

佐藤武義「翻訳語としての万葉語―「春」の複合語を中心に―」(『佐藤喜代治教授退官記念国語学論集』桜楓社1976)は、『万葉集』に頻出する「はるがすみ」の語が「春霞」の翻訳語である可能性を指摘している。ただし、そうであったとしても、『佩文韻府』は「春霞」の他に「秋霞」「冬霞」も立項しているし、『文選』二十七の「望荆山」(江淹)の「雲霞は川漲に肅(さむ)し」のように秋冷と結びついても使われる。したがって、「春」との関係の深さが「かすみ」と「霞」の共通項であったとは考えにくい。むしろ、『万葉集』に「あさかすみ」が八例、そのほかにも朝夕に関するものが多いことが注意される。「あさきり」もかなりあるが、上述の距離感の問題と複合させると、「霞」と「かすみ」の接点が見えてくるように思われる。なお、朝焼け・夕焼けを専らに指す語を持つている我々は、

「かすみ」と「あさやけ・ゆうやけ」を画然と別の現象と認識しているが、上代人も我々と同じように見ていたと決めてかかることは危険である。認識の分節化はかなりの程度言語に依存し、かつ①で見たように、朝焼け・夕焼け専用の上代語の存在は知り得ないからである。和語「かすみ」が指す現象の主要なものが、現在の我々の理解と同じ「浮遊微粒子による視界不良」であることは、動詞「かすむ」の意味から見てまず動かない。しかし、実際の用法において、朝焼け・夕焼けに似た現象を指す場合がないとはいひ切れぬ。『万葉集』巻十一「春雜歌」には、

ひさかたのあめのかぐ山この夕べ霞たなびく春立つらしも（二八二二）

たまかざる夕さりくればさつ人のゆつきが岳に霞たなびく（二八二六）

冬過ぎて春きたるらし朝日さす春日の山に霞たなびく（二八四四）

などがあるが、これらを朝夕の実景を叙するものとすれば、「かすみ」が朝日や夕日を反映して赤みがかった色彩を呈しているとの理解は、必ずしも排除されない。あるいは、

鶯の春になららし春日山霞たなびく夜目に見れども（二八四五）

は夜間の霞で、平安期以降はほとんど詠まれないものであるが、これも残照と関わる可能性が（①に示した「ほてり」の歌から類推すれば）考えられそうである。これら朝夕以外でも、「かすみ」は多くの場合、色相はともかくある明るさを帯びて広がるものではないかと考えられ、そうとすれば、その点にも

「霞」との重ならないしは接点が見い出せよう。

なお、「かすみ」と「きり」とが、言葉として指すものの次元はかなり異なるものであることは、上記井上論文も指摘する。そうである以上、自然科学的把握と関連づける場合にも、単純に同一対象に対応するべきではない。『角川古語大辞典』は「細かい水滴が空中に浮遊するために、空がぼんやりする現象」と説明し、これならば現在の気象用語で「霧」とされるもの（及び薄い霧が「もや」と呼ばれる場合）と同一の現象となる。しかし、上述のように朝焼け・夕焼けまでを範囲に含むかどうかは別としても、平凡社版『気象の事典』（1986）

山など遠くの景色がかすんで見える現象で、気象学の用語ではない。薄い層雲、霧、もや、煙霧などを通して見る場合おこる。

とする定義が、「かすみ」の語の説明としてはより妥当といふべきであろう。多くの場合、「きり」のように眼前の視野を遮ることはなく、遠くで柔らかく光を反射しているわけであるから、それを形成している浮遊微粒子の実体の区別は、中世以前の人々にとっては関心外の事柄である。証明は困難なことながら、凝結水滴以外の気象学上「煙霧」と呼ばれる現象のうち、工業化・都市化以降のいわゆるスモッグ以外のもの、特に春先の強風による塵埃の浮遊や、同じく春によく観察される黄砂現象が、「かすみ」として認識されていた可能性は十分考えられ、

それによつて春の季節との結びつきが理解され得るかも知れない。語による分節と、自然科学的な現象の区分とは、当然のことながら必ずしも対応しないのである。

#### ④「霞」の範囲と「かすみ」との接点

「漢語「霞」は、和語の「かすみ」とは明らかに違い、朝焼け夕焼けの雲をいう」（柳沢良一「和漢朗詠集を読む」「霞」と「かすみ」）、『国文学』1989のものであり、「紅」「赤」「丹」などと優越的に結びつくことは、用例的にも語源的にも動かない。ただし、川村晃生「詩語と歌語のあいだ―霞の色―をめぐって」（『國學院雑誌』199411）、田中幹子「浅緑の霞について―和漢朗詠集「碧羅」と千載佳句「碧煙」―」（札幌大学「史料と研究」24、1995）も注意するように、「霞」と色彩との結びつきには幅がある。このことは、「霞」自体に、すべて和語「朝焼け・夕焼け」に置き換えられない意味の幅があることを示唆するであらう。

白雲隨玉趾 青霞雜桂旗（文選二十二・鐘山詩応西陽王教・沈約）

鬱青霞之奇異、入脩夜之不易（同十六・恨賦・江淹）

は、（後者は比喩的用法であるが）空の青さの広がりを目指すようである。

撫凌波鳧躍、吸翠霞天矯（文選十二・江賦・郭璞）

は、水面上の霧様の広がりのように解される。また、『佩文韻府』は「白霞」の用例もあげている。おそらく「霞」は、広義に用いられれば、ある色や光の領域として空中に広がっているものを指すことのできる語でもあったのではなからうか。光（明るさ）との結びつきは、「連氣累靄、掩日韜霞」（文選・雪賦・謝惠連）などから窺われる（この例では、「靄」「靄」が「霞」の光を覆い隠すのである）。「広がり」という要素との結びつきは、

集若霞布、散如雲綃（前掲、江賦）

鏤章霞布（文選十四・赭白馬賦・顔延之）

など、「霞布」の形の存在からも示唆される。おそらく「雲」の立体性に対して、より面的な現象と見られていたのではないか。そしてこのことは、おのずから、前項で見た和語「かすみ」の範囲との、接触または重なりの可能性を物語っている。

半澤幹一・津田潔『新撰万葉集』注釈稿（上巻・春部・一七七）（『共立女子大学文学部紀要』40、1994）は、第3首語釈の「雲霞」の項で次のように述べている（前掲、川村論文にも引用）。

「霞」は「かすみ」と大きく意味・対象にズレがあるわけではない。ズレがあるとすれば、むしろそれを見る人間の色彩感覚や季節感の方であらう。そうでなければ、類書で「烟」や「霧」等と一緒に分類されるわけがない…

「かすみ」と「霞」を分ける通説の反復に終始しない点では、傾聴される発言である。ただし、言うまでもなく言葉の意味は「それを見る人間」と切り離せない。そして、「それを見る人間」の見方は、彼が所属する言語共同体の語彙体系に依存している。中国の類書の体系も、現代の気象学用語の体系も、上代人の語彙体系も近世人の語彙体系も、天空の諸現象を「見る人間」の、それぞれ少しずつ異なつた見方を示しており、そのなかで現象と語との関わり方も様々に異なっているのである。それによつて生じる「ズレ」や一方での重なりを、できるだけこまやかに把握することは、言葉の専門家である我々の仕事であろう。もとよりこの覚え書きは右の課題に確実に答えてはいないが、答に近づくための論点のいくつかを示し得たのではないかと思う。

〔補注〕『文選』は『全釈漢文大系』により、訓読については『新釈漢文大系』も参照した。引用に際して、一部の字体を変更した。

〔付記〕文献の探索などに関してご教示を得た、北山田正、近藤明、加藤和夫の各氏に感謝申し上げる。

（本学教官）